

第3章

地球市民学

第1節 地球市民学 前期 多文化コミュニケーションと情報

鈴木 克彦・佐藤 愛子

【抄録】 「多様性からの統合」をテーマに多文化社会に生きるための考え方を身に付けていく。クラス全体での授業のほか、日本文化、異文化心理、英語の3つの下位テーマに基づき、3グループにわかれての学習を行う。また、学んだことを科学的に分析し、思考し、地球市民としてとるべき行動を身に付ける。

【キーワード】 多文化 グループワーク 自文化 異文化理解 言語 多様性 統合

1. 目的

始めに、コミュニケーションの意味を知識と体験を通して見つめ直し再認識する。次に、自国文化を再認識しながら、世界の多様な文化の存在に気づき(Awareness)、異なる文化に対する感性(Sensitivity)を高め、文化や文明間に存在する諸問題に対して柔軟に行動(Action)できる力を養う。

2. 目標

縦軸に、日本文化、異文化コミュニケーション、英語ニュースという軸を設定し、横軸に、日本、欧米、アジア、という軸を置きながら、各文化の共通性と異質性を理解、体験し多文化コミュニケーションの重要性や必要性に気づき、異なる文化に対する感性と寛容性を高める。

3. 学習計画における具体的目標

- (1) それぞれのグループに関連する学習内を取り入れ、グループでの合同学習を実践する
- (2) 同質性と異質性の両方をバランスよく授業内容の中に取り入れる
- (3) ゲストの留学生や講師を効果的な流れの中で導入し学習する。
- (4) 各活動や・外部講師等の後で十分な振り返りの時間を取る。
事前・事後の活動時間と振り返りの時間を充分とる。
- (5) 半期の学習計画全般を通して知識と体験のバランスのとれた学習をする。
- (6) 後期の地球市民学との学習計画との連続性を意識する。

4. 授業計画

回	予定日	日本文化グループ	異文化コミュニケーショングループ	英語ニュースグループ
1	4月12日(金)	SLP IIの概要説明、各グループの説明、希望調査		
2	4月19日(金)	日本のところを探る① 【桜】	異文化コミュニケーション 【マナーのちがいがい】	講義 英語記事の読み方 英語記事のルール インターネット上の英語ニュースを読む
3	4月26日(金)	日本のところを探る② 【ことば】	異文化コミュニケーション 【常識のちがいがい】	講義 インターネットで検索 世界の事情 レポート①
4	5月10日(金)	特別授業1 野田先生 コミュニケーション合同ワークショップ		
5	5月17日(金)	日本のところを探る③ 【表現】	異文化コミュニケーション 【ことばのちがいがい】	演習 インターネットで検索 レポート②
6	5月24日(金)	特別授業2 高井先生 文化とコミュニケーション 合同ワークショップ		
7	5月31日(金)	日本のところを探る④ 【宗教文化】	異文化コミュニケーション 【価値観のちがいがい】	演習 インターネットで検索 レポート③
8	6月7日(金)	日本のところを探る⑤ 【年中行事】	異文化コミュニケーション 【Critical Thinking】	演習 グループ内発表と議論
9	6月28日(金)	まとめ 夏休探究課題の説明		

10	9月13日(金)	夏休探究課題「受け入れる溶け込む」の発表①(グループ別)
11	9月20日(金)	夏休探究課題「受け入れる溶け込む」の発表②(グループ別)
12	9月27日(金)	発信型多文化コミュニケーション 合同学習の準備
13	10月4日(金)	特別授業3 高井先生 多文化コミュニケーション 合同ワークショップ、発表
14	10月11日(金)	振り返り 総括 事後アンケート

5. 特別授業

大学の先生により、クラス全体に向けての授業が行われた。地球市民学を、社会学および心理学からとらえ、それぞれ文化の異なる人々や社会に触れたときに、どのようなことが起こり得るのかについての講義であった。生徒はふだんの授業よりも具体的かつ専門的な授業に興味を持って取り組むことができた。とくに、大学の教授による講義には、データ分析や発話分析などより細かく調べ上げられたデータなどが提示され、内容そのものの以外にも学ぶところが多くあった。

(1)中部大学大学院国際関係学研究所 野田 真里教授

コミュニケーション合同ワークショップが行われた。多文化社会をサバイブするために必要となるコミュニケーションの方法や、野田先生が経験された海外での具体的な体験をお話いただいた。とくに、言語・非言語コミュニケーションを体験的に学習した。知っていることで回避できたであろうトラブルや、英語という言葉の壁によるトラブルなど、想像しやすく、だれもが海外へ行ったり外国人と交流したり際に経験しうることであった。そのため、生徒は海外へ出るにあたって、どのようなことを知っておくべきかということを考える機会となった。

(2)名古屋大学大学院教育発達科学研究科 高井 次郎教授

社会心理学の視点から、西洋東洋の文化の持つ特徴について講義していただいた。異文化に触れたときに、人々はどのような感情を持ちやすいのか、またそれらの感情がどのような心理状況から発生しているのかということについて、具体例を交えながらお話いただいた。とくに、コミュニケーションにおける異質性に対する嫌悪など、異文化であったとき持ちやすい負の感情や、それを意識し、対応していくことについて学んだ。異文化を心理学という視点からみることにより、生徒自身が海外へ出る際に、カルチャーショックやそれに対応するすべについて考える機会となったと思われる。

6. グループ授業

(1)日本文化グループ 国語科 杉山貴一

日本文学や生活の中にある日本独特の文化について、その中にみられる日本らしさを考える機会となった。外国と比較することにより、日本らしさが際立って見えて

くるところから、生徒は自文化への気づきを得ることができた。

(2)異文化コミュニケーショングループ 英語科 佐藤愛子

異文化にであったときに生じやすいコミュニケーションに関するトラブルを、体験的に学習していく。また、ロールプレイやディスカッションなどで感じたことについて、話し合い、それを通して生徒自身の異文化に対する感情の傾向を知る機会とした。また、異文化は海外の文化に限らず、仲の良い友人にまで広げて考えることができ、ふだんからどのように感情をコントロールすべきかを生徒は考えることができた。

(3)英語ニュースグループ 英語科 鈴木克彦

インターネット上にて閲覧可能な情報を、読み解き、またそれを他者に伝えるという活動を行った。外国の出来事を理解するためには、自身の常識だけでは判断することはできないということに気づききっかけとなった。判断するために必要なバックグラウンドや環境、条件として、何を知る必要があるのかということを考え、それを踏まえたうえで、ニュースを日本人に伝えることをした。

7. 成果と課題

「異文化に接する」ということについて、いくつかの視点やアプローチがあることを生徒は気づくことができた。それぞれのグループの活動が、異質なものに接することによる影響についても考える機会となった。多文化について考えるとき、他文化の特徴を知ることによって終始しがちである。しかし、カルチャーショックや多文化社会で必要となる能力は、異質性嫌悪をいかに認識し、自分の心の動きにどう対処していくか、相手に対してどう動いていくか、という点が重要である。今回は特別講演や探究課題を通して、他文化を受け入れ、また自文化と融合していくことに目を向けることができた。今後は、理想とする多文化社会での自分の動き方や、その実際など、より現実的な活動をする機会を設けたい。実際に他文化に触れてみる機会を持ち、実際にどのような心の動きがあるか、どのような視点、意識を持って行動することが、多文化理解につながるのか、実体験できる場を提供する必要があるだろう。

(文責：佐藤愛子)